

琉球語の指示体系

2012年7月22日

中日理論言語学研究会

田畑千秋（大分大学）

同志社大学大阪サテライト・オフィス

1、はじめに（問題の所在）

【李長波論文】

李長波 2002『日本語指示体系の歴史』によって、日本語における指示表現の研究がおおいに進んだ。李は、指示表現の基本体系について、端的に次のように述べている。

通言語的に見ても、言語史的に見ても、「一人称・二人称・三人称」という三つの人称が均質的な面 plan 上に鼎立するものでないことは明らかになった。そして、我々は、人称体系のあり方として、「一人称対非一人称」の人称対立をなす人称体系と、「一・二人称対三人称」の人称対立をなす人称体系という二つの型を認めることができる。因みに、人称体系においても、指示体系においても、前者の人称体系は「一人称」を中心に置く限り、後者より主観性に優れ、後者は「一人称・二人称」との対立を軸とする限りにおいてより客観性に優れていることは言うまでもない。

この李の発言は、元来、一人称・二人称・三人称が、それぞれ同格で位相する必然性はないことを喝破し、くわえて日本語指示体系コソア研究に共時的視座と同時に通時的視座も与えていこうとするもので、ひとり日本語研究だけでなく、広く個別言語研究に、とりわけ琉球語研究には、大きな示唆を与えるものである。

【琉球語研究】

初期の琉球語研究は、伊波普猷以来、日琉同祖論に確固たる思想基盤を与えつつ（一部の人は「与えるために」と言うが、それは言い過ぎであろう）進展してきたが、琉球語研究の側からいえば、（日琉同祖論という思想的背景作りとは別に、純粹に個別言語の研究としても）自らと唯一体系的に親縁と認められる大言語日本語の一大方言として日本語体系の中に位置を占めながら研究したほうが、（対照研究上）便利であったと思われる。ただ、大言語日本語をあまりに近くに置いての（一部の人と言うように「大言語日本語に抱かれての」と言っただけであろう）研究であったため、（国家体制づくりという歴史的要請が大きかったことは当然であるが）、日本語との「ずれ」を大きな問題としなかったように思われる。たとえば、日本語の目的格が「～ヲ」であるのに対し琉球語では「～φ」であること、また、日本語では現象動詞の無生物主語が「～ガ」であるのに対し、一部琉球語では「～φ」が認められることなどはあまり丁寧に説明されてこなかった。

【問題提起】

現代琉球語（はなしことば）の指示体系は、その形態から、「コ系・オ系・ア系（カ系）」に分けられる。そしてそれがいわゆる「一人称・二人称・三人称（自称・対称・他称）」の人称体系にも大きくかかわっていることは先行研究が確認しているし、一部は **Native Speaker** も肌で感じている。

なお、琉球語研究においても、コ系を近称、オ系を中称、ア系を遠称と、発話者からの距離を用語化して論じるのが一般的であるので、それに従っておきたい。また、不定称ド系についてはここではあつかわない。

当然のことながら、このテーマに関しては、内間直仁をはじめ多くの研究者による継続的かつ示唆に富む研究があることは周知のとおりである。

本発表は、現代琉球語の指示体系の諸相を簡単に整理報告するものであり、中日理論言語学研究会が琉球語に、より以上の関心を示して下さるようにとの思いから発表するものである。

2、三諸相の概観

【近称（コ系）・中称（オ系）・遠称（ア系カ系）の形態】

日本語のコ・ソ・アに対照される琉球語の指示体系はク・ウ・ア（宮古・八重山でカになる地域もある）で、全琉球語に広く認められ、その祖形研究から研究上、コ系・オ系・ア系（カ系）と称される。これがいわゆる近称・中称・遠称の基本体系となっている。このコ系・オ系・ア系（カ系）と称する理由は、中本正智 1978「指示代名詞の構造と祖形」が、事物をあらわす指示代名詞近称（日本語のコレに対応）の祖形に **kore** を、中称（日本語のソレに対応）に **ore** を、遠称（日本語アレに対応）に **are**（奄美・沖縄）・**kare**（宮古・八重山）を推定し、あわせて、場所をあらわす指示代名詞近称（日本語ココに対応）の祖形に **koma** を、中称（日本語ソコに対応）に **oma** を、遠称（日本語のアソコに対応）に **ama**,（奄美・沖縄）・**kama**(宮古・八重山)を推定して、その説が支持されているからである。

琉球語指示体系を俯瞰的にみると、その体系中に日本語と同じく遠称・中称・近称を有していることは、まず確認しておかなくてはならない事実である。

【早い時期の報告・平山輝男 1966『琉球方言の総合的研究』】

早くは、平山輝男 1966『琉球方言の総合的研究』（平山 1966）が、奄美語・沖縄語の人称体系・指示体系を表に作成している。指示体系表から興味深い事例を拾ってみよう。

[奄美（沖永良部・和泊）・玉城方言]

コレ・ソレに対応・・・●uri の一語のみ（●はグロツタルストップ）・・・物

ココ・ソコに対応・・・●ma'a（●はグロツタルストップ）・・・所

注記・・・玉城方言では、コ・ソの区別がはっきりせず、この概念は厳密には区別されない。

[沖縄 (北部)・辺土名方言]

huri…コレ・ソレの両方に対応…物

huma…ココ・ソコの両方に対応…所

hunu…コノ・ソノの両方に対応…関係。

【平山輝男 1967『琉球先島方言の総合的研究』の報告】

平山 1966 につづいて刊行された平山輝男 1967『琉球先島方言の総合的研究』(平山 1967) は、宮古語、八重山語の人称体系・指示体系を表に作成している。指示体系表から興味深い事例を拾ってみよう。

[宮古・大浦方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nci'i の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'Nci'inu の一語のみ…情態

[宮古・狩俣方言]

コレ・ソレに対応…'uri の一語のみ…物

ココ・ソコに対応…'uma の一語のみ…場所・方角

コノ・ソノに対応…'unu の一語のみ…関係

コウ・ソウに対応…'a'Nzi の一語のみ…情態

コンナ・ソンナに対応…'a'Nzinu の一語のみ…情態

コンナニ・ソンナニに対応…'a'Nzidu の一語のみ…情態

[宮古・平良方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nci'i の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'Nci'inu の一語のみ…情態

[宮古・与那覇方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nsi の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'Nsinu の一語のみ…情態

ソンナニ・アンナニに対応…'a'Nsi'ina'a の一語のみ…情態

[宮古・池間方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nsi'i の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'inu の一語のみ…情態

[宮古・来間方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nci'i の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'Ncinu の一語のみ…情態

[八重山・石垣方言]

ソウ・アアに対応…'a'Nzi の一語のみ…情態

ソンナ・アンナに対応…'a'Nzinu の一語のみ…情態

ソンナニ・アンナニに対応…'a'Nzidu の一語のみ…情態

[八重山・竹富方言]

ソナナ・アンナに対応…'a'iru の一語のみ…情態

[八重山・西表租納方言]

ソレ・アレに対応…'uri の一語のみ…物

ソノ・アノに対応…'unu の一語のみ…関係

ソナナ・アンナに対応…'a'qsiru の一語のみ…情態

ソウ・アアに対応…'asi の一語のみ…情態

[八重山・波照間方言]

ソレ・アレに対応…'uri の一語のみ…もの

ソコ・アソコに対応…'ha の一語のみ…所

ソノ・アノに対応…'unu の一語のみ…関係

ソナニ・アンナニに対応…'u'Nsuku の一語のみ…情態

[八重山・小浜方言]

ソノ・アノに対応…'unu の一語のみ…関係

ソナナに対応…無し…情態

【近い時期の報告・名護市史編さん委員会 2006『言語 ―やんばるの方言―』】

また、近くは、名護市史編さん委員会 2006『言語 ―やんばるの方言―』（名護市 2006）が、「やんばる言語地図」の「これ」の項で、次のように述べている（ここでの「やんばるの方言」とは国頭語〈沖縄北部方言〉である）。（※ 表は若干田畑がリライトした。）

（p145、名護地区方言の解説

（名護地区では）「これ」「それ」「あれ」の三項を区別するのは宮里、大兼久、喜瀬方言だけです。他の方言は、話者に近いものを指す近称と、話者から遠いものを指す遠称のみをはっきり区別する、二項対立の方言です。「それ」に当たる中称（聞き手に近いものを指す）に関しては、どちらかで代用する、あるいは該当するものがない、などの答えが得られています。

（p423、近称の解説）

一方、語頭に子音のない「ウリ」（←「おれ」）は、歴史的には中称の指示代名詞なのですが、これを近称に用いる方言も本部町・今帰仁村・名護地区等の中央山原を中心に多く分布しています。

（p425、中称の解説）

クリ、フリ、ウリ、アリの四つの形すべてが、中称の指示代名詞として用いられる可能性があります。

三項対立の方言の多くはウリを中称に、またアリを遠称にあげます。この種の方言の内、近称がクリの方言（タイプ1）が南山原やヤードゥイ集落・伊江村・伊平屋村・伊是名村に、また近称がフリの方言（タイプ2）が大宜味村、今帰仁村、名護地区周辺、伊江村・伊平屋村等に分布しています。歴史的にはフリは近称の指示代名詞クリ（←これ）の摩擦化によって生じたのに対し、ウリは古い中称の指示代名

詞「おれ」が起源であるので、クリ・フリを近称、ウリを中称に用いるのが自然です。しかし、逆にウリを近称にあげる方言（タイプ3,4）もないわけではありません。歴史的起源が曖昧になっている上、フリの語頭の摩擦音が弱化すると容易にウリになることから、このような混同が生じたのでしょう。（なお、「これ」の場合と同じく、今帰仁村と羽地地区でリが長母音化する場合がありますが、下の表には示しません。）

三項対立の方言

	近称	中称	遠称	
タイプ 1.	クリ	ウリ	アリ	恩納村恩納、宜野座村宜野座、金武町金武、伊江村・伊平屋村の一部
タイプ 2	フリ	ウリ	アリ	大宜味村田港・白浜・津波、今帰仁村の一部、名護地区宮里・喜瀬、伊江村・伊平屋村の一部
タイプ 3	ウリ	クリ	アリ	金武町屋嘉
タイプ 4	ウリ	フリ	アリ	久志地区大浦、羽地地区呉我・真喜屋、屋我地地区饒平名

一方、二項対立方言の場合、近称と中称にクリ、フリまたはウリ、遠称にアリをあげる方言（たとえば名護地区の城・東江）と、その逆に、中称と遠称の両方に「アリ」をあげる方言（たとえば本部町謝花。伊野波・波里・辺名他）とにおおまかにわかれます。中称の扱いがこのように割れる理由は、話し手と聞き手が近ければ、聞き手のそばにあるものをアリで指すことになるという、この種の方言の指示詞に固有の曖昧さのためでしょう。話者が、「それ」に当たる指示詞は存在せず、と答えた方言も多くあります。北山原に空白の目立つのはこうした理由によります。中称の指示代名詞の形によって、この種の方言を分類すると、下のようになります。

二項対立の方言

タイプ 1.	クリ	恩納村の一部、宜野座村惣慶・漢那（クィー）
タイプ 2	クリまたはウリ	本部町健壁、羽地地区古我知、屋部地区宇茂佐、名護地区数久田・許田
タイプ 3	フリ	国頭村全域、大宜味村大兼久・根路銘・屋古、本部町の一部、羽地地区田井等・仲尾、屋我地地区我部、今帰仁村の一部、名護地区城、久志地区嘉陽・安部、伊江村東江上・西江前、伊是名村仲田
タイプ 4	フリまたはウリ	大宜味村塩屋、今帰仁村兼次、伊平屋村野甫
タイプ 5	ウリ	国頭村宜名真、大宜味村大宜味、東村川田（ウイ）、本部町の西側、羽地地区の一部、今帰仁村仲尾・古宇利（ウイ）、名護地区周辺、久志地区瀬嵩、大宜味村大兼久、国頭村宜名真
タイプ 6	アリ	本部町の東側、今帰仁村玉城、羽地地区古我知、名護地区大兼久・許田、久志地区瀬嵩、大宜味村大兼久、国頭村宜名真
タイプ 7	アリまたはウリ	今帰仁村諸志、金武町伊芸
タイプ 8	アリまたはフリ	久志地区嘉陽、国頭村安波

(p427、遠称の解説)

遠称の代名詞は、すべて、アリ（一）、またはそれから派生したアイ（一）、アンです。

3、研究の現況

【内間直仁の研究】

内間直仁 1984『琉球方言文法の研究』（内間 1984）はコ系・オ系・ア系の「形態」と「形態を越えたところにある機能（指示する内容）」から琉球語の指示層を次のように分類し、そのことについて解説している（※ 表は若干田畑がリライトした。）。

（p67、o系の性格）話材の代名詞の各類は、さらに大きく次の甲種、乙種、丙種にまとめることができる。“事物”の代名詞に例をとって示す。

甲種	I類	ko系（これ）	o系（これ、それ）	/ a系（あれ）
	II類	ko系（これ、それ）	×o系無し	/ a系（あれ）
	III類	×ko系無し	o系（これ、それ）	/ a系（あれ）
乙種	IV類	ko系（これ） /	o系（それ、あれ）	a系（あれ）
	V類	ko系（これ） /	o系（それ、あれ）	×a系無し
丙種	VI類	ko系（これ） /	o系（それ）	// a系

これからわかることは、o系の語は甲種ではko系と対立を示さず、乙種ではa系と対立を示さないということである。丙種では、ko系・o系・a系が相互に立体的にはりあい関係を保っているが、その丙種の中には、精密に調査すれば、甲種I類か乙種IV類に分類しなおされるものも含まれている。そうすると、琉球方言のほとんどは甲種・乙種のどちらかであるといえよう。

これからすると、琉球方言におけるo系は、ある地域（主に奄美・沖縄方言）では、その意味領域がko系まで広がってko系を包みこみ、他の領域（主に宮古・八重山方言）では、a系まで広がってa系を包みこんでいるといえよう。このようなo系にあらわれる性格から、およそ次のようなことがいえる。

まず、甲種方言においては、異次元の発言者を中心とする心的領域とそれ以外のものとの自他の二極構造が認められる。一方、乙種には発言者を中心とする心的領域とそれ以外のものとの自他二極構造が認められる。両者の違いといえば、甲種がはじめから聴者の心的領域まで「自」の領域としているのに対し、乙種は聴者の心的領域を「他」とみなして区別しているという点である。いわゆる、乙種は甲種よりも限定された「自」の心的領域を有している。このような相異を示しつつも、甲種・乙種はいずれも自他二極構造を示すという点では共通する。

内間は琉球方言における指示と人称の体系を琉球方言地域の文化構造（共同体論理）とからめて、ともにウチ・ソトの論理で解明している。内間のウチ領域、ソト領域に関する研究は内間の研究初期からの研究テーマであったが、その集大成ともいえるのが内間 1984の第一章第2節「アガミ意識とワッター意識 —琉球方言の話材の代名詞から—」同第3節「琉球方言の代名詞 —「人」を表わす語を中心に—」および第2章「代名詞の記述的

研究」であるが、ここでは詳しくみることができない。その後出された内間直仁 1990『沖縄言語と共同体』（内間 1990）にこのことをわかりやすく説明している箇所があるので引用する。内間 1990 は、琉球方言における指示体系の二極構造と三極構造を次のように説明する。

（p23、指示体系の解説）琉球方言では、指示代名詞に三つの語形があらわれるところと、二つの語形しかあらわれないところがある。その中でももちろん三つの語形をもつ方言が多い。しかし、それよりもいわゆるコソアにあたるものとして二つの語形しかあらわれない方言もあるというところに琉球方言の特徴がある。この二つの語形をもつ方言は、奄美諸島では、沖永良部島、沖縄諸島では本島の国頭村および東村、久高島、久米島鳥島、宮古諸島では狩俣、大神島、八重山諸島では波照間島、西表島租納など、比較的辺鄙なところであるという点で共通している。この二つの語形をもつ方言からいえることは、これらの方言では、指示代名詞は、近・中・遠の三極構造で用いられているのではなく、二極構造で用いられているということである。この二極とは、人称代名詞などの構造とからめてとらえるならば、恐らくウチとソトの関係であろう。このように解すると、琉球方言の指示代名詞の用法もウチ・ソト意識を反映したものといえよう。

【名護市 2006 の研究】

山原にもたらされた古い三項対立の指示代名詞の体系は、「フリ」（近称）、「ウリ」（中称）、アリ（遠称）となって定着したのでしょう。しかし、時を経るにつれて、各地でフリとウリの区別が曖昧になったようです。これは、遠近のみを区別する二項対立が山原の土着空間意識であったためだと考えられます。「クリ」（近称）、「ウリ」（中称）、「アリ」（遠称）の体系は、その後の時代に、中南部からもたらされたものです。

4、おわりに

琉球語の指示体系について簡単にみてきた。琉球列島における指示体系の二項対立、三項対立は言語事実として共時態に存在する。その事実を内間は人称体系ともからめて、ウチ領域、ソト領域という二項対立概念を使って説明する。確かに指示体系と人称体系は琉球語においても密接な関係を有しているし、特にアガミ（一人称複数内包形）意識、ワッター（一人称複数排外形）意識とも関係していそうである。また、「なぐるぞ」の構文が（共通語に訳すと）、「なぐられるぞ」となるのが一般的な喧嘩の方法であること等々、受け身表現法にもかかわっているのかもしれない。そして、相手の所に行くときの表現を、英語では相手に敬意を表して、“I'll come to you .”（←goではなく come を使用する。）というが、沖縄語（九州方言）でも、「私があなたの所へ来る（共通語訳）」と構文化する。

これら諸々の言語事象を内間のウチ領域・ソト領域の共同体論理だけで説明し尽くすことができるであろうか。中日理論言語学研究会員の意見をいただきたい。